

原著

幼児期から親子で始める性教育が親子関係に与える効果

若井和子*1 秦久美子*2 渋谷洋子*3 藤井清美*4

要 約

本研究は、幼児期から親子で始める性教育プログラムを親子一緒に受講することが、その後の親子関係に与える効果について考察することを目的とした。筆者らが開催する幼児期から親子で始める性教育プログラム全3回を受講した3～4歳児および5～6歳児親子の保護者を対象に質問紙調査を実施した。調査項目は、①MP親子関係診断検査票による「親が子どもに対する自分の関わりを自覚すること」「親から見た子どもの様子」、②STAI (State-Trait Anxiety Inventory-form JYZ) 調査票による親の「状態不安得点」「特性不安得点」③自由記載により「性教育プログラム受講後の子どもの変化」についてであった。分析は受講クラス別に第1回目と第3回目の結果を比較し親子関係に影響する項目との関連性をみた。さらに、性教育プログラムの受講回数を重ねることで子どもに見られた変化をText Mining Studioを用いて分析を行った。その結果、①性教育プログラムを受講した親子の特徴は、3～6歳児全員いきいき型が最も多く、親の子どもに対する関わりは3～4歳児クラスの親の場合、厳しく躰ける親が多く、5～6歳児クラスの親は、子どもを可愛がり躰は緩やかなM型と子どもと距離を置き厳しく躰けるP型の正反対のタイプが多かった。②親が今感じている不安状態は、性教育の教え方がわからない初回受講時が最も高く、受講により変化する。③親子で性教育プログラムを受講することで、親がわが子の自尊感情が育まれる時期に子どものニーズに応じた学習支援ができ、親自身が育児の自己効力感を高め、子どもの感情リテラシー発達を促す育児につながる事が明らかになった。

1. はじめに

わが国の性教育は、戦後の荒廃期に青少年の不良化および男女の不純な交友の問題を防止するために昭和21年に『青少年不良防止について』、昭和22年に『純潔教育の実施について』の通達から始まった¹⁾。性教育の主な内容は、男女間の道徳と秩序を守り、婚前交渉を控えるべきであると教えることであった。当時の文部省は、その後も性教育には消極的であり初潮を迎える小学校高学年の女子に月経教育を行うまでに留まっていた。昭和50年代に入り、性解放の影響により性感染症や若年妊娠の増加などが社会問題として取り上げられたのを契機に性教育に対する考え方が変化し始めた。そして今日では、性教育が心と体の健康教育の中に取り入れられるなど学校教育以外に助産師および保健師らの専門職に性教育の実施を求められるようになってきた³⁾。文

部省の示す『学校における性教育の考え方』⁴⁾には、幼稚園の性教育目標として「自分の誕生」「男女の違いの認識」「生命の尊さ」「男女のいたわり合い」が明記されている。性教育は、幼児期から子どもの養育に携わる親や教師によって行われることが望ましい。しかし、一般的に性教育に対する認識が多様であり、親や教師自身が性教育の教え方を学習していないため、幼児に正しく性教育を行うことは難しい。若井ら⁵⁾は、先行研究において幼児期から『親子で始める性教育』に参加する親の半数以上が子どもの社会的情緒的発達を促す学習内容を期待していることを報告した。幼児期は自己概念の発達する時期にあり、周囲のおとなや子ども達の行動を観察し、自己の行動変容や習得を繰り返している。このような社会的発達段階にある子どもは、周囲への興味・関心が高まり次々と親や教師に質問を投げかけてく

*1 福山平成大学 看護学部 看護学科 *2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 保健看護学科

*3 奈良県立医科大学 看護実践 キャリア支援センター *4 姫路大学 看護学部 看護学科

(連絡先) 若井和子 〒720-0001 福山市御幸町上岩成正戸117-1 福山平成大学

E-mail: settle@heisei-u.ac.jp

る。親は、その質問が性に関する内容であると自信をもって返答することができず、子どもにどのように対応して良いのか戸惑うことが往々にある。

そこで筆者らは、親子が一緒に性教育を学ぶことができる『幼児期から親子で始める性教育プログラム』(全3回)を実施した。本プログラムは、親子一緒に受講を重ねていくことで、親子が共通の話題で会話でき、家庭においても親による性教育が継続できる親子関係を築くことをねらいとした。

2. 研究目的

『幼児期から親子で始める性教育プログラム』全3回(以下、性教育プログラムと称す)を受講することが、親子関係に与える影響について考察することを目的とした。

用語の定義に「性教育とは、心とからだの健康教育」とした。

3. 研究方法

3.1 研究対象

A～D市に居住する3～6歳児親子で、性教育プログラム(第1～3回)を受講した保護者を対象に質問紙調査を行い、全3回出席した親子のデータを有効回答とした。

3.2 調査方法および調査内容

- 1) 調査票①により、対象者の背景について男女別の呼称、性別役割、プライベートゾーン、自己存在感について子どもに教えたか、立会い出産希望の有無について等、第1回目性教育プログラム終了後に調査を実施した。
- 2) MP親子関係診断検査票②により、「親が子どもに対する自分の関わりを自覚すること②-1」、「親から見た子どもの様子②-2」を第1回目および第3回目終了時に調査した。
- 3) STAI調査票(State-Trait Anxiety Inventory-form JYZ)⁷⁾を用いて、保護者が「今まさに、どのように感じているのか(STAI:Y-1)」、「普段一般にどのように感じているのか(STAI:Y-2)」を毎回調査した。
- 4) 性教育プログラム受講後の子どもの変化について第2回目および第3回目終了時に自由記載で調査した。

3.3 性教育プログラム内容

幼児期の性教育の目標から3つのテーマを定め、幼児の発達段階に応じて、3～4歳児親子クラス、5～6歳児親子クラスで実施した。性教育のテーマは①「はじめましてあかちゃん」、②「生まれてきてくれてありがとう」、③「男女のからだの違い、自

分も大切・みんなも大切」とし、教材には、a:エプロンシアター(胸当てエプロンを舞台にポケットから子宮・胎児・胎盤を取り出しながら説明する方法)、b:ペープサート(紙人形劇のことで紙に人物を描いて切り抜いて棒を付けて動かすなどして演じる方法)、c:パネルシアター(布製パネルに切り抜いた人形を貼りながら話を進めていく、動きのある紙芝居に類似した方法)を用いた。d:ポートフォリオ:親子で性教育を共有してきた成果物を扶むファイルであり、第1回～第3回までの教材を資料にして挟んだものを参加者全員に配布した。

3.4 研究期間

平成26年6月～28年8月。

3.5 倫理的配慮

A～D市にある保育園および幼稚園を通じて研究協力依頼文書一式を保護者に配布した。研究協力者に、研究目的を口頭と文書で説明し、同意を得た。子どもの同意については、親の代諾とし、協力の可否は自由決定であること、匿名性の保持、結果の公表などについて承諾を得た。本研究は、研究者の所属する施設において倫理委員会の承認(No.12005)を得て実施した。

3.6 分析方法

量的データ分析にはSPSS ver.24を用いた。調査票①により、家庭における性教育の実施状況を把握した。MP親子関係診断検査票②-1では、M得点(情緒的な関わり:子どもを優しく受容して可愛がっているか)、P得点(知的な関わり:子どもを立派にしようと考え、厳しい躰をしているか)との組合せから親の関わり4つのタイプ(「M型:子どもを可愛がり躰が緩やか」、「P型:子どもと距離を置き、厳しく躰る」、「W型:子どもを可愛がるが、躰は厳しい」、「O型:子どもと距離を置き、躰は緩やか」)に分類した。②-2では、H得点(朗らか傾向)、G得点(頑張り傾向)の組合せから、親から見た子どものタイプを4つ(「ひっそり型:のびのびしておらず頑張りも見られない」、「朗らか型:頑張りは見られないがのびのびしている」、「頑張り型:のびのびしてはいないが頑張りは見られる」、「いきいき型:のびのびしていて頑張りも見られる」)に分類した。STAI調査については、状態不安得点(不安を喚起する一過性の状況反応であり、その時々で変化する。状態不安尺度で評価される本質的な特質は、懸念、緊張、神経質、悩みなど)、特性不安得点(不安傾向に比較的安定した個人差を示し、普段、一般にどのように感じているのかを査定する)を求めた。更に性教育プログラムの受講回数と親子関係に影響する項目(状態不安得点、特性不安得点、M得点、H

得点, G 得点, 保護者の年齢, 子どもの年齢, きょうだいの人数)との関連性について, 性教育受講当初と全プログラム受講後の比較を行うために第1回目と第3回目のデータを Wilcoxon 検定により分析した。

また, 性教育受講後の子どもの様子について自由記載された質的データは, Text Mining Studio を用いて特徴語分析 (Cosine 法) と言葉ネットワーク (共起関係) により分析を行った。特徴語分析は, テキスト全体を1つのベクトルとして考え, 受講クラスを属性とし, 属性に特徴づけられるベクトルと抽出単語で特徴づけられるベクトルとの類似度を求められた指標値0.3以上について判断した。抽出単語を【 】, 言語データを “ ” で表示した。

言葉ネットワークは, 分析対象となる単語の共起関係 (単語の前後関係を無視) についてエッジ (矢印) の濃さにより信頼度の高さを示し, エッジの方向は受講クラスに抽出される言葉の確立の方向を示した。

4. 結果

4.1 性教育に関する親子の背景

対象者は母親34名, 父親1名であり, 保護者の平均年齢は34.63歳 (SD4.76), 祖父母と同居6名 (17.1%) であった。対象者が性教育を教わった相手は, 「教師21名 (60.0%)」, 「親と教師の両方12名 (34.3%)」, 「教わってない2名 (5.7%)」であった。子どもの平均年齢は, 2.97歳 (SD1.01), きょうだいの年齢は, 2歳13名 (37.1%), 3歳15名 (42.9%), 4歳6名 (17.1%), 5歳1名 (2.9%) であった。子どもの人数は, 1人29名 (82.9%), 2人5名 (14.3%) 3人0名, 4人以上1名 (2.9%) であった。母親全員が, 幼児期から性教育を必要と回答しており, 性別による躰を28名 (80.0%) が必

要とし, 兄姉としての役割があることを教えた30名 (85.7%), 男の子・女の子の呼称を教えた23名 (65.7%), 男女の体の違いを教えた27名 (77.1%), プライベートゾーンを教えた24名 (68.6%), 赤ちゃんが生まれてくる部位 (産道) を教えた19名 (54.3%), 自己の存在価値を教えた35名 (100%), 次子の出産に立会わせたいと27名 (77.1%) が回答した (図1)。

4.2 MP 親子関係診断検査の結果

4.2.1 自分の子どもに対する親の関わりのタイプ

3~4歳児親子クラスを受講した親が子どもに対する自分の関わりの自覚は, 第1回目の調査において, P 型9名 (40.9%) > W 型6名 (27.3%) > O 型4名 (18.2%) > M 型3名 (13.6%) の順であった。第3回目の調査において, P 型8名 (36.4%)・W 型8名 (36.4%) > M 型4名 (18.2%) > O 型2名 (9.1%) の順であった。第1回目および第3回目とも「子どもと距離を置き厳しく躰る:P 型」および「子どもを可愛がるが躰は厳しい:W 型」が上位を占めており, 両者の共通点は「厳しく躰る」ことであった。

5~6歳児親子クラスを受講した親が子どもに対する自分の関わりの自覚は, 第1回目の調査において, M 型5名 (38.5%) > W 型3名 (23.1%)・O 型3名 (23.1%) > P 型2名 (15.4%) の順であった。第3回目の調査において, M 型4名 (30.8%)・P 型4名 (30.8%) > O 型3名 (23.1%) > W 型2名 (15.4%) の順であった。上位を占めたのは, 子どもを可愛がり躰は緩やかなタイプが多かったが, 3回目の受講では, 「子どもを可愛がり躰が緩やか:M 型」と「子どもと距離を置き厳しく躰る:P 型」のように正反対のタイプが上位を占めていた (図2)。

4.2.2 親から見た子どもの様子

3~4歳児親子クラスを受講した親から見た子どもの様子は, 第1回目の調査において, いきいき型15

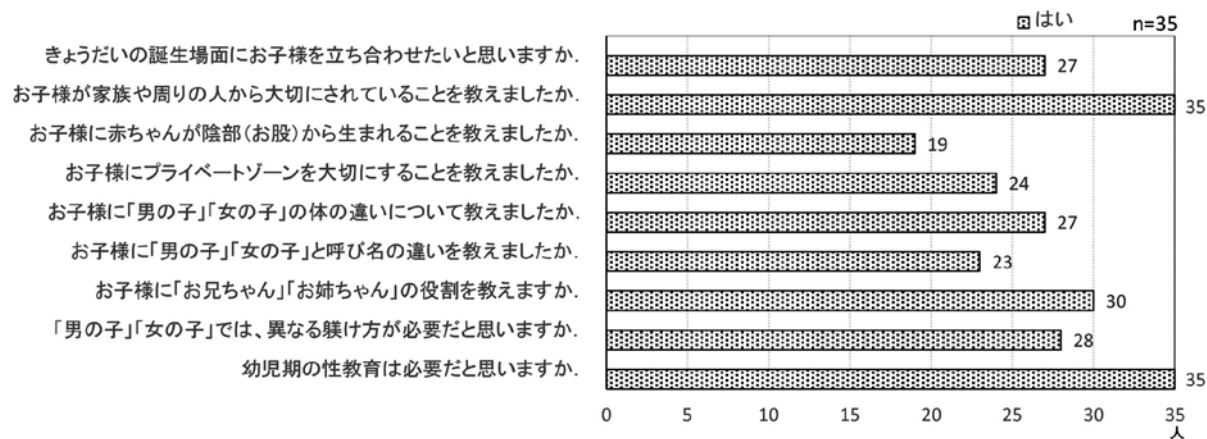


図1 性教育に関する親の背景

名 (68.2%) > 朗らか型4名 (18.2%) > ひっそり型2名 (9.1%) > 頑張り型1名 (4.5%) の順であった。第3回目の調査において、いきいき型12名 (54.5%) > ひっそり型7名 (31.8%) > 朗らか型3名 (13.6%) > 頑張り型0名の順であった。第1回目および第3回目とも「のびのびしていて頑張りも見られる：いきいき型」が上位であった。

5～6歳児親子クラスを受講した親から見た子どもの様子は、第1回目の調査において、朗らか型4名 (30.8%)・いきいき型4名 (30.8%) > ひっそり型3名 (23.1%) > 頑張り型2名 (15.4%) の順であった。第3回目の調査において、ひっそり型5名 (38.5%)・いきいき型5名 (38.5%) > 朗らか型2名 (15.4%) > 頑張り型1名 (7.7%) の順であった。第3回目は、「のびのびしておらず頑張りも見られない：ひっそり型」と「のびのびしていて頑張りも見られる：いきいき型」の正反対のタイプが上位を占めていた (図3)。

4.3 STAI 調査の結果

3～4歳児親子クラスを受講した状態不安得点の平均値は、第1回目37.86点 > 第3回目36.23点 > 第2回目35.50点であった。特性不安得点の平均値は、第1回目41.64点 > 第3回目40.27点 > 第2回目40.14点の順であった。

5～6歳児親子クラスを受講した状態不安得点の平均値は、第1回目36.85点 > 第3回目36.54点 > 第2回目35.46点であった。特性不安得点の平均値は、第2回目43.38点 > 第1回目42.0点 > 第3回目39.46点の順で

あった。状態不安得点は両クラスとも第1回目が最も高かった (図4)。

4.4 性教育プログラム受講回数と親子関係に影響する項目との関連性

表1のとおり、受講クラス別にみた性教育プログラム受講回数と親子関係に影響する項目との関連性について Wilcoxon 検定を用いて分析を行った。その結果、3～4歳児親子クラス受講回数において状態不安得点は、子どもの年齢、きょうだいの人数との関係において有意差があった ($p < 0.001$)。特性不安得点は、保護者の年齢、子どもの年齢、きょうだいの人数との関係において有意差があった ($p < 0.05$)。M得点は、保護者の年齢、子どもの年齢、きょうだいの人数との関係において有意差があった ($p < 0.001$)。P得点は、保護者の年齢、子どもの年齢、きょうだいの人数との関係において有意差があった ($p < 0.001$)。H得点は、保護者の年齢、子どもの年齢、きょうだいの人数との関係において有意差があった ($p < 0.001$)。G得点は、保護者の年齢、子どもの年齢、きょうだいの人数との関係において有意差があった ($p < 0.001$)。

5～6歳児親子クラス受講回数において状態不安得点は、子どもの年齢、きょうだいの人数との関係において有意差があった ($p < 0.001$)。特性不安得点は、保護者の年齢 (第1回目) 子どもの年齢、きょうだいの人数との関係において有意差があった ($p < 0.05$)。M得点は、保護者の年齢、子どもの年齢、きょうだいの人数との関係において有意差があった

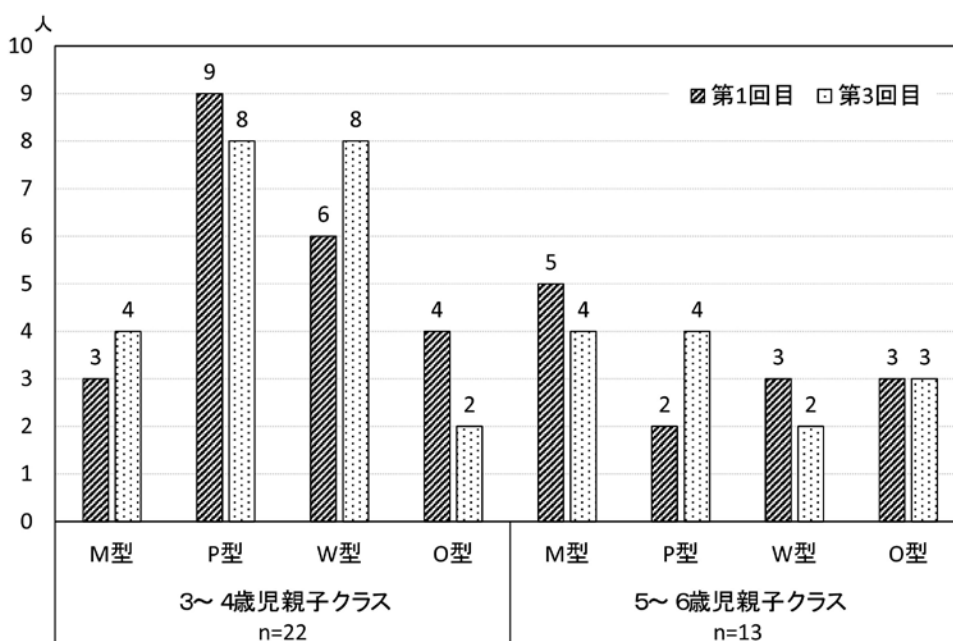


図2 自分の子どもに対する関わりのタイプ

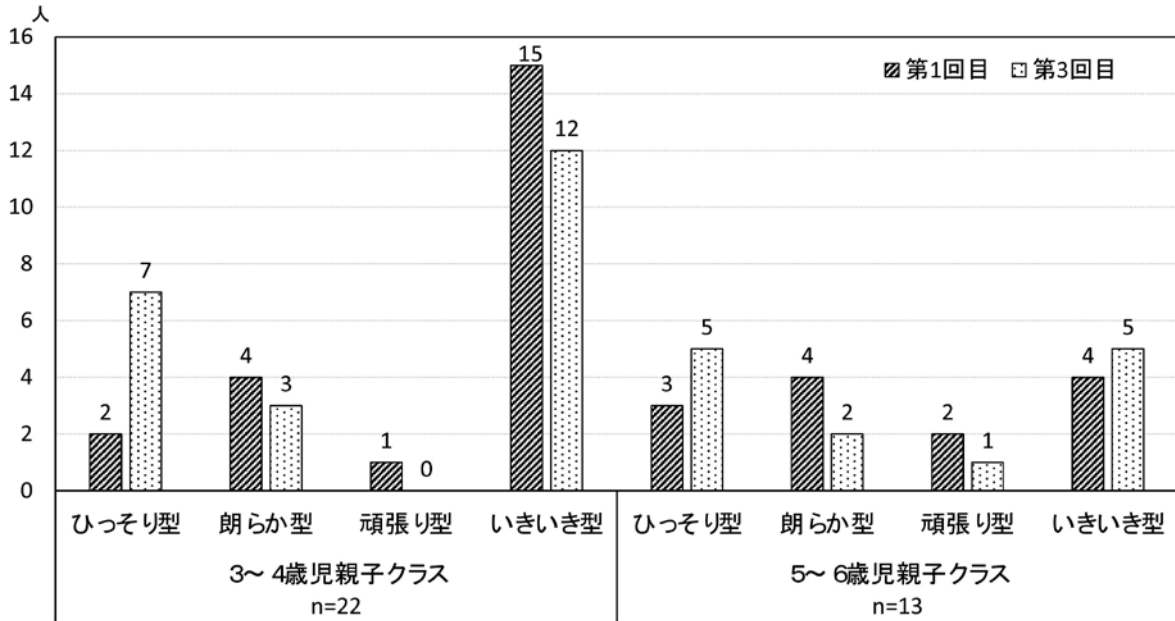


図3 親から見た子どもの様子

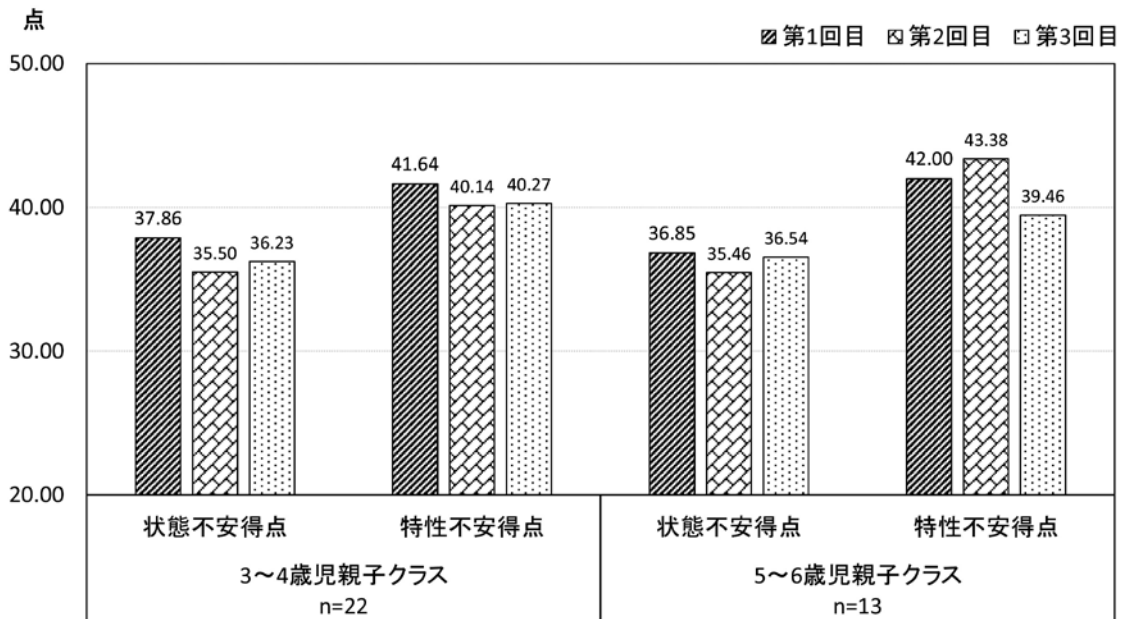


図4 受講講座別 STAI 調査の平均得点

($p < 0.05$). P 得点は, 保護者の年齢, 子どもの年齢 (3 回目), きょうだいの人数との関係において有意差があった ($p < 0.05$). H 得点は, 保護者の年齢, 子どもの年齢, きょうだいの人数との関係において有意差があった ($p < 0.01$). G 得点は, 保護者の年齢, きょうだいの人数との関係において有意差があった ($p < 0.05$).

4.5 性教育プログラム受講後の子どもの変化

第1回目と第2回目の性教育プログラムを受講して約1ヵ月後の子どもの変化について第2回目および第

3回目終了時に受講クラス別に自由記載による調査を行った。第2回目の平均文字数54.4個, 延べ単語数148個, 単語種別数83個であり, 語彙の豊かさを示すタイプ・トークン比は0.56であった。第3回目の平均文字数25.7個, 延べ単語数164個, 単語種別数83個であり, 語彙の豊かさを示すタイプ・トークン比は0.50であった。

4.5.1 受講クラス別にみた特徴語抽出結果

第2回目終了時に調査した3～4歳児クラスの特徴

表1 性教育受講回数と親子関係に影響する項目との関連

得点項目	受講クラス	平均値 (SD)		保護者年齢			子どもの年齢			Wilcoxon検定 中央値 (四分位範囲)			きょうだいの人数		
		1回目	3回目	1回目	3回目	1回目	3回目	1回目	3回目	1回目	3回目	1回目	3回目	1回目	3回目
状態不安 得点	3~4歳 [n=22]	37.86 (10.71)	36.23 (9.57)	36.50 (31.00-41.75)	38.00 (29.25-45.25)	36.50 (31.00-41.75)	38.00 (29.25-45.25)	36.50 (31.00-41.75)	38.00 (29.25-45.25)	36.50 (31.00-41.75)	38.00 (29.25-45.25)	36.50 (31.00-41.75)	38.00 (29.25-45.25)	36.50 (31.00-41.75)	38.00 (29.25-45.25)
	5~6歳 [n=13]	36.85 (9.32)	36.54 (6.80)	33.00 (30.00-45.50)	36.00 (30.50-42.00)	33.00 (30.00-45.50)	36.00 (30.50-42.00)	33.00 (30.00-45.50)	36.00 (30.50-42.00)	33.00 (30.00-45.50)	36.00 (30.50-42.00)	33.00 (30.00-45.50)	36.00 (30.50-42.00)	33.00 (30.00-45.50)	36.00 (30.50-42.00)
特性不安 得点	3~4歳	41.64 (10.52)	40.27 (10.38)	40.00 (33.75-45.50)	39.50 (34.00-49.25)	40.50 (33.75-45.50)	39.50 (34.00-49.25)	40.50 (33.75-45.50)	39.50 (34.00-49.25)	40.50 (33.75-45.50)	39.50 (34.00-49.25)	40.50 (33.75-45.50)	39.50 (34.00-49.25)	40.50 (33.75-45.50)	39.50 (34.00-49.25)
	5~6歳	42.00 (8.71)	39.46 (9.49)	44.00 (35.00-47.50)	37.00 (31.50-47.00)	44.00 (35.00-47.50)	37.00 (31.50-47.00)	44.00 (35.00-47.50)	37.00 (31.50-47.00)	44.00 (35.00-47.50)	37.00 (31.50-47.00)	44.00 (35.00-47.50)	37.00 (31.50-47.00)	44.00 (35.00-47.50)	37.00 (31.50-47.00)
M得点	3~4歳	6.45 (3.58)	6.73 (2.51)	5.50 (4.00-9.25)	7.00 (4.00-9.00)	5.50 (4.00-9.25)	7.00 (4.00-9.00)	5.50 (4.00-9.25)	7.00 (4.00-9.00)	5.50 (4.00-9.25)	7.00 (4.00-9.00)	5.50 (4.00-9.25)	7.00 (4.00-9.00)	5.50 (4.00-9.25)	7.00 (4.00-9.00)
	5~6歳	7.38 (3.66)	7.00 (3.72)	8.00 (4.00-10.50)	6.00 (4.50-10.50)	8.00 (4.00-10.50)	6.00 (4.50-10.50)	8.00 (4.00-10.50)	6.00 (4.50-10.50)	8.00 (4.00-10.50)	6.00 (4.50-10.50)	8.00 (4.00-10.50)	6.00 (4.50-10.50)	8.00 (4.00-10.50)	6.00 (4.50-10.50)
P得点	3~4歳	8.18 (3.16)	7.64 (2.97)	8.50 (5.75-11.0)	8.50 (5.75-11.0)	8.50 (5.75-11.0)	8.00 (6.00-9.00)	8.50 (5.75-11.0)	8.00 (6.00-9.00)	8.50 (5.75-11.0)	8.00 (6.00-9.00)	8.50 (5.75-11.0)	8.00 (6.00-9.00)	8.50 (5.75-11.0)	8.00 (6.00-9.00)
	5~6歳	6.08 (4.31)	6.92 (3.99)	5.00 (2.00-10.00)	5.00 (2.00-10.00)	5.00 (2.00-10.00)	5.00 (2.00-10.00)	5.00 (2.00-10.00)	5.00 (2.00-10.00)	5.00 (2.00-10.00)	5.00 (2.00-10.00)	5.00 (2.00-10.00)	5.00 (2.00-10.00)	5.00 (2.00-10.00)	5.00 (2.00-10.00)
H得点	3~4歳	12.18 (1.89)	11.55 (2.56)	12.00 (11.75-14.0)	12.00 (11.75-14.0)	12.00 (11.75-14.0)	12.00 (10.00-14.0)	12.00 (11.75-14.0)	12.00 (10.00-14.0)	12.00 (11.75-14.0)	12.00 (10.00-14.0)	12.00 (11.75-14.0)	12.00 (10.00-14.0)	12.00 (11.75-14.0)	12.00 (10.00-14.0)
	5~6歳	11.00 (1.83)	11.00 (2.12)	12.00 (9.50-12.00)	12.00 (9.50-12.00)	12.00 (9.50-12.00)	11.00 (9.50-12.00)	12.00 (9.50-12.00)	11.00 (9.50-12.00)	12.00 (9.50-12.00)	11.00 (9.50-12.00)	12.00 (9.50-12.00)	11.00 (9.50-12.00)	12.00 (9.50-12.00)	11.00 (9.50-12.00)
G得点	3~4歳	8.36 (3.43)	7.23 (3.21)	8.00 (6.00-11.00)	8.00 (6.00-11.00)	8.00 (6.00-11.00)	7.50 (4.75-10.00)	8.00 (6.00-11.00)	7.50 (4.75-10.00)	8.00 (6.00-11.00)	7.50 (4.75-10.00)	8.00 (6.00-11.00)	7.50 (4.75-10.00)	8.00 (6.00-11.00)	7.50 (4.75-10.00)
	5~6歳	5.38 (3.38)	5.46 (3.89)	4.00 (3.00-8.50)	4.00 (3.00-8.50)	4.00 (3.00-8.50)	4.00 (3.00-8.50)	4.00 (3.00-8.50)	4.00 (3.00-8.50)	4.00 (3.00-8.50)	4.00 (3.00-8.50)	4.00 (3.00-8.50)	4.00 (3.00-8.50)	4.00 (3.00-8.50)	4.00 (3.00-8.50)

* p < 0.05 ** p < 0.01 *** p < 0.001

語抽出では、【見る】“自分が赤ちゃんだった頃の写真を何度も見るようになりました”，【大事】“弟を大事にするようになりました”，【お腹】“自分がお腹の中にいた時のことをよく質問してくるようになりました”，【赤ちゃん】が指標値0.3以上を示した(表2)。5～6歳児クラスでは、【欲しい】“赤ちゃんが欲しいと言うようになりました”，【話す】“自分はこんなかったよね、と話していました”，【赤ちゃん】であった。第3回目終了時点の3～4歳児クラスの特徴語抽出では、【赤ちゃん】であり、5～6歳児クラ

スさんのお股のトンネルを通して生れてきた”が原文にあった(図5)。第3回目終了時点での3～4歳児クラスの言葉ネットワーク図は、【ママ】【大好き】【お腹】【見る】【変化+ない】【楽しむ】【ちんちん】【生まれる】であり、5～6歳児クラスでは【いか】【歌う】【お父さん】【大事】“お父さんにお尻を触られたら大事な所を触らないで、と怒っていました”“お父さんが裸でいたら大事な所を隠さないといけないと言っていました”と原文があった(図6)。

表2 受講クラス別特徴語抽出(第2回目)

3～4歳クラス		5～6歳クラス	
単語	指標値	単語	指標値
見る	0.37	欲しい	0.37
大事	0.37	話す	0.37
お腹	0.35	赤ちゃん	0.32
赤ちゃん	0.32	お母さん	0.30
お父さん	0.18	お腹	0.23
生まれる	0.18	お父さん	0.18
積極的	0.18	生まれる	0.18
様子	0.18	積極的	0.18
お母さん	0.15	様子	0.18

Cosine法

スは【いか】“いかのおすしをよく歌っています”，【歌う】，【赤ちゃん】であった(表3)。

4.5.2 受講クラス別にみた言葉ネットワークの結果

第2回目終了時点での3～4歳児クラスの言葉ネットワーク図は、【お腹】【いる】【大事】【見る】が太いエッジで示され，“お腹の中にいたときの写真を何度も見ていた”が原文にあった。5～6歳児クラスでは、【欲しい】【赤ちゃん】【お母さん】【生まれる】【話す】が太いエッジで示され，“赤ちゃんが欲しい”“お

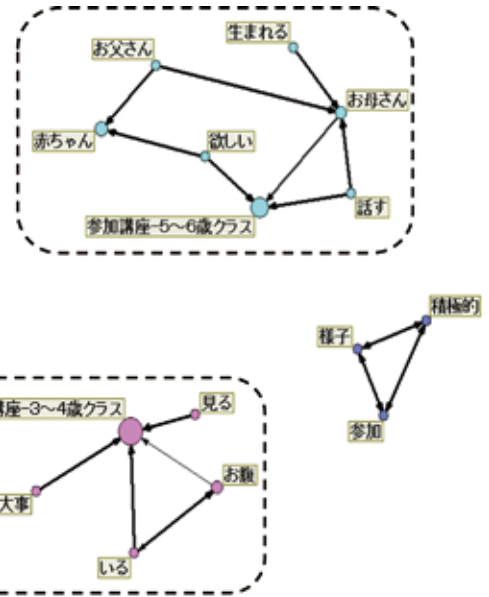


図5 受講クラス別にみた子どもの変化 ネットワーク図(第2回目)

5. 考察

5.1 感情リテラシー発達への効果

3～4歳児の発達には、ピアジェの心理的発達段階に照合すると前操作期に該当する。この発達段階は2歳後半から形成され始め、直接知覚不可能な事物について言葉で説明を受け、想像を主体に理解する表象(心理機能)が発達する時期である⁸⁾。また、この時期は自己概念が発達し始めているため、自分が見聞きするあらゆる事象に興味・関心を示し質問をしたがる。3～4歳児の言動には、自分が得た情報のうち卑猥な言葉や行動が記憶に残り、周囲の関心を自分に向けようとして模倣するのである。藤野と本村⁹⁾は日常生活における幼児の言動には感情リテラシーにより表現の仕方に違いがあることを述べている。感情リテラシーとは、自分自身の中に沸き起こっている感情を知覚し、それを言葉で表現できる能力(感情の読み書き能力)のことである。また、3～4歳児は対人関係場面で何らかの言葉による感情表現

表3 受講クラス別特徴語抽出(第3回目)

3～4歳クラス		5～6歳クラス	
単語	指標値	単語	指標値
赤ちゃん	0.30	いか	0.41
お腹	0.28	歌う	0.41
ちんちん	0.28	赤ちゃん	0.33
ママ	0.28	興味	0.20
楽しむ	0.28	減る	0.20
見る	0.28	言葉	0.20
生まれる	0.28	出す	0.20
大好き	0.28	出る	0.20
変化+ない	0.28		
興味	0.14		
減る	0.14		
言葉	0.14		
出す	0.14		
出る	0.14		

Cosine法

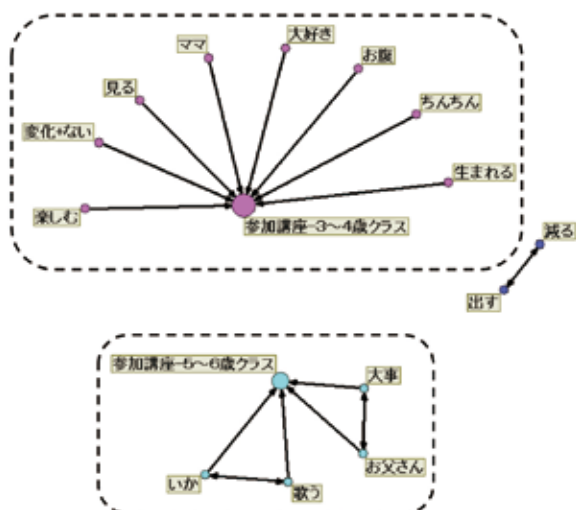


図6 受講クラス別にみた子どもの変化 ネットワーク図(第3回目)

が可能であり、表現をする際は、他者の反応に着目して感情を推測することは難しいが、5~6歳児になると他者の言動やあらゆる情報を統合して感情を推測すると同時に感情を表現する語彙を用いることができると述べている。今回の調査結果では、8割の親が男女の異なる躰を必要と考えており、MP親子関係診断結果において、3~4歳児をもつ親が子どもに対する自分の関わりへの自覚には、第1回目および第3回目とも「子どもと距離を置き厳しく躰ける：P型」と「子どもを可愛がるが躰は厳しい：W型」タイプが多かった。「のびのびして頑張りも見られる：いきいき型」が多かった3~4歳児には、好奇心が旺盛で、他者の反応を推測できないまま自分が得た卑猥な言動の模倣により感情表現をする特徴がある。しかし、親はわが子の言動を心理的発達段階の特徴として受容し難いため、必然的に厳しく躰けようとして関わる傾向にある。子どもに対する親の関わりタイプは、親子で性教育を受講した回数とは無関係であり、親は子どもに厳しく躰けたいという特徴があった。その一方で、親から見た子どもの様子には「のびのびして頑張りも見られる：いきいき型」が多く、躰を必要としない生活場面においては、わが子を受容しながら育児を行っていることが考えられる。

5~6歳児は、論理的な思考や認知力が特に発達する時期であり、具体的な思考段階から論理的な思考へと橋渡しをしていく時期にある¹⁰⁾。この発達段階にある幼児が感情を表現する語彙を使用して繰り返し他者に表現することで感情リテラシーを発達させていくのである。親子関係診断結果において、5~6歳児をもつ親が子どもに対する自分の関わりへの自覚

は、第1回目が「子どもを可愛がり躰は緩やかな：W型」が多かったが、第3回目の受講後には、「子どもを可愛がり躰が緩やかな：M型」と「子どもと距離を置き厳しく躰る：P型」が多く、対称的であることが特徴であった。また、親からみた子どもの様子も第1回目は、「頑張りは見られないがのびのびしている：朗らか型」が多く、第3回目は、「のびのびしておらず頑張りも見られない：ひっそり型」と「のびのびして頑張りも見られる：いきいき型」が多く第1回目と比較すると対称的であった。この現象は、5~6歳になるまで子どもの性格特性が個々に異なっている上に個々を取り巻く社会環境が影響して、感情リテラシーに差異が生じるのである。そのため、必然的に親が自覚する子どもへの関わりや子どもの様子も対称的となる。

5.2 育児自己効力感獲得への効果

状態不安得点、特性不安得点、M得点、P得点、H得点、G得点について保護者の年齢、子どもの年齢、きょうだいの人数との関連性が受講回数により認められたが、第1回目と第3回目の各平均値の差は3点未満であることから、全3回の受講回数では親子関係を検証するには限界があった。

しかし、状態不安得点および特性不安得点が第1回目と比較して第3回目が低値であることは、言語データの分析結果から次のように述べるができる。3~4歳児は、性教育を受講することで赤ちゃんという他者が母親の腹部に存在していることを知り、親への質問と回答のやり取りを繰り返す。そして赤ちゃんの存在を通して自己の誕生期に遡り、乳児期の自分の写真や赤ちゃんについての絵本などを手掛かりに視覚的情報を得て自己の存在を誕生時期から認識することができる。親子と一緒に受講することで、親は質問期にある子どもが何を知りたいのか、何について学習の振り返りを行っているのか推測できる。そして、親は子どもの学習に必要な情報や写真などの教材を提供し、わが子の学習ニーズを満たすことができ、子どもは満足感を得るのである。このように子どもに働きかける親の支援行動は、親自身が育児に対する自己効力感を得ることになる。杉本と並木¹¹⁾は、育児の自己効力感を高める要因に自己の子育てを振り返り、子どもへの対応の仕方や子ども自身をよく省察することであると述べている。5~6歳児が赤ちゃんを欲しがるのは、自分以外の弱い他者に対する愛おしい思いが感情リテラシーの発達により表出されたのを親が観察している。また、自分が学習した「いかのおすし」を歌い、父親や周囲の他者に語彙を用いて感情表現するとともに注意喚起を促している。

このように親子で性教育プログラム受講することで、親は家庭においてわが子の疑問に対する学習支援を適宜行うことができる。つまり、子どもの自尊感情が育まれている時期に親が性教育を教えることは、親自身が育児の自己効力感を得ることができ、子どもの感情リテラシーの発達を促す育児につながっているのである。

6. 結論

本研究結果から以下のことが明らかになった。

- 1) 性教育プログラムを受講した親子の特徴は、3～6歳児全員いきいき型が最も多く、親の子どもに対する関わりは3～4歳児クラスの親の場合、厳しく躰ける親が多く、5～6歳児クラスの親は、子どもを可愛がり躰は緩やかなタイプと子どもと距離を置き厳しく躰ける正反対のタイプが多かった。
- 2) 親が今感じている不安状態は、性教育の教え方がわからない初回受講時が最も高く、受講によ

り変化する。

- 3) 幼児期から親子で性教育プログラムを受講することは、わが子の自尊感情が育まれる時期に子どもの感情リテラシーの発達を促し、子どものニーズに応じた学習支援ができることから、親自身が育児の自己効力感を得ることができる。

7. 研究の限界

今回の調査は、性教育プログラム全3回を1ヵ月間隔で開催しており、約3ヵ月の期間で親子関係の変化について分析するには限界があった。今後は、パネル調査を行うことで長期的な親子関係の評価を行うことが課題となった。

謝 辞

本研究は、JSPS 科研費 (JP26670998) の助成を受けて実施した。

本研究にご協力いただきましたお子様と保護者の皆様に心よりお礼申し上げます。

文 献

- 1) 文部科学省：学制百年史 第八節 四 社会教育の諸活動 学校開放と学級諸講座。
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/others/detail/1317783.htm, 1981. (2017.3.12確認)
- 2) 柳園順子：戦後改革期における「純潔教育」の始動—日本キリスト教婦人矯風会の純潔運動に着目して—。近大姫路大学教育学部紀要, 8, 115-121, 2015.
- 3) 三浦陽子, 鳩田紀磨子：小学6年生の長子に対する母親の性教育に伴う思い—「母の語り」の分析をとおして—。母性衛生, 51(1), 119-126, 2010.
- 4) 文部省：学校における性教育の考え方, 進め方。4版, ぎょうせい, 東京, 2003.
- 5) 若井和子, 秦久美子, 渋谷洋子, 藤井清美：親子で学ぶ性教育プログラムに対する親の期待。川崎医療福祉学会誌, 24(2), 191-199, 2015.
- 6) 水野正憲：MP 親子関係診断検査活用手引。適正科学研究センター, 1980.
- 7) 肥田野直, 福原真知子, 若脇三良, 曾我祥子, Spielberg CD：新版 STAI マニュアル。実務教育出版, 2012.
- 8) ジャン・ピアジェ, 滝沢武久訳：思考の心理学—発達心理学の6研究—。みすず書房, 1968.
- 9) 藤野沙織, 本村祐里佳：日常生活における幼児の感情リテラシーの発達。法政大学大学院紀要, 75, 79-88, 2015.
- 10) 中島力編著：子どもの社会的発達。初版, ソフィア, 東京, 1993.
- 11) 杉本信, 並木真理子：母親の子どもに対する怒り感情の抑制と評価, 子育てに関するメタ認知及び育児自己効力感との関連。保育学研究, 52(2), 135-148, 2014.

(平成29年5月9日受理)

The Effect of Parent-Child Sex Education Starting from Infancy on the Parent-Child Relationship

Kazuko WAKAI, Kumiko HADA, Yoko SHIBUYA and Kiyomi FUJII

(Accepted May 9, 2017)

Key words : sex education, infant child, parent-child relationship, emotional literacy, parenting self-efficacy

Abstract

The purpose of this study was to consider the effect on the parent-child relationship after participation in a sex education program that started with the parent and their infant child. We conducted a paper-based questionnaire survey with the parents of three to-four year-olds and five to six-year-olds who participated in a sex education program held for parents and their infant child. The surveyed items were (1) the MP parent-child relationship diagnostic test and “the parent’s type in the parent-child relationship,” (2) the parent’s “state anxiety score” and “trait anxiety score,” and (3) changes in the child after participating in the sex education program. The results obtained were as follows: (1) many of the 3-6 years old children who participated were the full-of-life type. There were many strict parents among the 3 to 4-year-olds. Most of the parents of the 5 to 6-year-olds were the M type of loving and being strict gently and the P type of keeping a distance from the child and disciplining severely. M and P types are contrary in nature. (2) The parents’ anxiety score was higher at the first lecture, but changed through participation. (3) When a parent and their child attend a sex education program together, parents can support their child’s learning according to their needs at the time when the self-esteem of the child is being nurtured. Thus, it was shown that sex education raises the parents’ effectiveness in matters of childcare and encourages the development the child's emotional literacy.

Correspondence to : Kazuko WAKAI

Department of Nursing

Fukuyama Heisei University

Fukuyama, 720-0001, Japan

E-mail : settle@heisei-u.ac.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.27, No.1, 2017 75 – 84)